

生活機能向上研修 食支援 part 南部会場 開催報告



実技セミナーの様子

済生会京都府病院 リハビリテーション科
主任作業療法士・安田 耕一郎氏



実技セミナーの様子

京都府歯科衛生士会 乙訓支部支部長
歯科衛生士・岩崎 香代氏

1月28日(土)、生活機能向上研修食支援 Part が、京都府医師会館で開催されました。医師24名、多職種32名の方が参加され、①済生会京都府病院 リハビリテーション科 主任作業療法士・安田 耕一郎氏より「食べやすい食事環境」、②京都府歯科衛生士会 乙訓支部支部長 歯科衛生士・岩崎 香代氏より「食べられるお口づくり」、③京都九条病院 課長 摂食・嚥下障害認定看護師・下條 美佳氏より「食支援における医師の役割」についてご講義いただきました。基礎講義のあとは講師を作業療法士が担当するグループと歯科衛生士が担当するグループに分かれ、実技セミナーを行いました。各専門職による食支援の実際を学ぶ事により、多職種連携の必要性を実感できた研修会となりました。



京都九条病院 課長
摂食・嚥下障害認定看護師・下條 美佳氏

第4回 総合診療力向上講座

1月14日(土)、『『かかりつけ医』としての要約能力〜プロブレムリストはいくつありますか?〜』をテーマに、市立福知山市民病院 研究研修センター長兼総合内科医長・川島 篤志先生にご講演いただきました。今回をもちまして本年度の全4回シリーズを終了いたしました。



北部会場(福知山市)

各回の参加状況は第1回206名、第2回173名、第3回132名、第4回137名で、のべ648名の医師にご参加いただきました。



市立福知山市民病院
研究研修センター長
兼総合内科医長・
川島 篤志先生



本会場(京都府医師会館)

第4回 京都在宅医療塾 I ~探究編~



京都府医師会館



梶原診療所在宅サポートセンター
長兼病棟医長、オレンジまっくとクリ
ニック所長・平原 佐斗司先生

2月19日(日)、第3回に引き続き、平原 佐斗司先生を講師に迎え、医師40名、多職種62名の合計102名が参加し、研修会を開催いたしました。筋萎縮性側索硬化症(ALS)の経過に沿った①運動障害、②呼吸障害、③嚥下・栄養障害、④コミュニケーション障害について、基礎講義と在宅医療の事例をもとに、病状の進行に伴うそれぞれの課題や本人の苦痛について学び、解決策をグループワークで深めることができました。

診療報酬・介護報酬で質問があればお問い合わせください。サポートセンターと保険医療課で連携し回答いたします。

お問い合わせ、ご意見及びご感想は
京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター
〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階
tel.075-354-6079 fax.075-354-6074

京都府医師会

在宅医療・地域包括ケア サポートセンター news

Vol.16

2017年3月15日

京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター
〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階 tel.075-354-6079 fax.075-354-6074

在宅医療・地域包括ケアサポートセンター news は奇数月15日の発行です。



◆認知症サポート医とは? 認知症初期集中支援チームとは? ◆認知症に関する研修会のご報告
◆府民公開講座のご報告 ◆在宅医療に関する研修会のご報告

平成28年度 地区介護保険担当理事連絡協議会を開催

介護保険制度に関する各市町村の取組み状況について情報共有

平成29年2月18日(土)、平成28年度地区介護保険担当理事連絡協議会を開催し、22地区から24名の先生と、オブザーバーとして京都府高齢者支援課、京都市長寿福祉課にご出席いただきました。

冒頭、京都府医師会 北川 靖副会長より、「2025年はスタート地点(序章)であり、その後、社会情勢は急激な変化に見舞われるため、今の段階から地域包括ケアの観念、医療・介護連携の推進、在宅医療推進拠点のあり方などについて検討を進めることが重要である」と挨拶し、活発な議論と情報共有をお願いしました。

■在宅医療・介護連携推進事業の進捗

拠点事業への取組みが具体化する方向へ

平成30年度から全市町村が地域支援事業として取組むことが求められている在宅医療・介護連携推進事業(いわゆる(ア)~(ク)の8項目)について、京都府から府内各市町村の取組み状況等について情報提供が行われました。一部の地区医師会では、地域医療介護総合確保基金を活用して先行的に取組みを始めている地域があるものの、ほとんどの市町村が地区医師会との連携も含め、様子見の状況であることが浮き彫りになりました。

一方で、京都市においては、平成29年度予算要求の中に、「在宅医療・介護連携支援センター(仮称)」構想が盛り込まれていることが明らかになりました。具体的には、在宅医療・介護連携コーディネーター(仮称)を配置し、在宅医療・介護連携推進事業に掲げられている「(オ)在宅医療・介護連携に関する相談支援」に対応できるセンターを、一定の地域単位で拠点として開設するというもので、平成29年度はモデルとして2箇所に開設するための予算要求が行われています。

府医といたしましても、各地域の拠点事業が有効に機能するよう、地区医師会との連携も含め、積極的に協力していきたいと考えています。

■介護予防・日常生活支援総合事業について

本年4月実施を控え、情報交換

各市町村において平成29年4月から本格実施される介護予防・日常生活支援総合事業(新しい総合事業)について、特に基本チェックリストの取扱い等を中心に情報共有を図るべく、京都市の相談受付のフローチャート(京都医報2017年2月15日号p.32~35参照)、乙訓地区(向日市・長岡京市・大山崎町)の「総合事業利用に係る医師の確認書」の運用、綾部地区(綾部市)の「通所型サービスの参加可否連絡票」の運用等について、ご報告いただきました。



認知症サポート医とは？

認知症患者の診療に習熟していて、かかりつけ医の認知症診断等に関する相談役・アドバイザーとなるほか、他の認知症サポート医との連携体制の構築・推進の役割や各地区医師会と地域包括支援センターとの連携づくりへの協力を担う医師であり『かかりつけ医認知症対応力向上研修』など、研修会の企画・立案、講演なども行い、地域における「連携」の推進役を期待されています。

今後、各市町村に設置される『認知症初期集中支援チーム』でもチームの一員となり、支援拒否や重度のBPSD（行動・心理症状）があるケースなどの助言を行います。

この認知症サポート医養成研修を受講するためには、地域において認知症の早期発見などの診療に取組み、認知症サポート医の役割を担うことが条件となっています。

現在、全国では、約6,000名のサポート医が養成されており、京都府内では101名のサポート医が養成されています。

初期集中支援チームとは？

認知症になっても本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で暮らし続けられるよう早期に関わり、受診勧奨や介護サービスに繋げるまで(約6ヵ月)の集中的な支援を実施できるよう、医療・介護・福祉・行政など、多職種で構成されたチームです。

早期発見・早期対応に向けた支援体制を構築し、地域の関係機関のネットワークと協働し、初動対応の要となるよう取組みを進めています。

現在、京都府内では6市町で実施されており、京都市では平成28年11月から、北区・上京区でモデル事業が実施されています。

現在、京都市内では6市町で実施されており、京都市では平成28年11月から、北区・上京区でモデル事業が実施されています。

認知症サポート医フォローアップ研修【北部会場(福知山市)】



慶應義塾大学医学部 教授・三村 将先生



10/29 北部

本研修の目的は「かかりつけ医が自ら率先して研鑽し、質の担保を行い、地域包括支援センター・一般府民・認知症疾患医療センター等との関係構築を図ること」としています。

今年度のテーマは、北部地域の生活と密着した問題となっている「認知症患者の自動車運転」を取り上げ、慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室 教授・三村 将先生からの基調講演と、認知症と運転について～事故事例を通じて～と題して、古木内科医院・古木 勝也先生の症例提示に基づき、グループディスカッションも活発に行われました。

かかりつけ医認知症対応力向上研修



9/3 綾部・福知山



11/26 宇治久世



1/7 下京東部・西部

今年度は、6地区(福知山・綾部、宇治久世、下京東部・西部、西京、中京東部・西部、相楽)で開催し、どの地区も多くの先生方にご出席いただきました。

本研修は、国が定める「認知症地域医療支援事業」の一環で、それぞれの地域において医療と介護が一体となった認知症の人への支援体制の構築を図ることを目的とし、かかりつけ医として必要で適切な認知症診断の知識・技術などの習得に資する内容となっております。



1/28 西京



2/4 中京東部・西部



2/18 相楽

かかりつけ医認知症対応力向上研修【集合研修】

11/5 南部会場(京都市)

(左)北山病院 澤田 親男先生
(右)はやし神経内科 林 理之先生



11/19 北部会場(京丹後市)

(左)京都府立医科大学附属病院 成木 迅先生
(右)齊藤医院 齊藤 治人先生



本研修は、高齢者が日頃受診する診療所等の主治医(かかりつけ医)に対して、適切な認知症診断の知識・技術、および認知症の人とその家族からの話や悩みを聞く姿勢や方法を習得するための研修を実施することにより、認知症サポート医(推進医師)との連携の下、各地域において多職種協働により医療と介護が一体となって、認知症の発症初期から状況に応じた患者の支援体制の構築を図ることを目的として実施しております。

今年度も、かかりつけ医だけでなく幅広い標榜科の先生方にもご参加いただけるよう基礎から応用、連携まで幅広い内容で研修を企画し、北部会場では医師13名、多職種45名、南部会場では医師33名、多職種34名にご出席いただきました。

● 受講者のご意見 (参加者アンケートより抜粋) ●

【北部会場】

ネグレクトについて理解できた。／認知症患者へのかかりつけ医の役割・薬剤の使用法について／BPSDへの対応には、投薬と「本人への対応の工夫」の両輪が重要と考えています。対応の工夫についても併せて学ぶ機会があればよいように思いました。／認知症はみんなで支えること／かかりつけ医の心得について、よくわかりました。

【南部会場】

認知症患者本人・患者家族を支えていく地域づくりの重要性についてよく理解できた。／新オレンジプランについてよく理解できた。／地域包括支援センターの役割がよくわかった。／医療・介護が連携し、地域で認知症の方の生活を見守っていくことがわかった。

府民公開講座開催報告

2月12日(日)医療法人ゆうの森 たんぽぽクリニック 理事長・永井 康徳先生を講師に迎え「自分らしく生きることを支える在宅医療～医療を変える・地域を変える・文化を変える～」と題した府民公開講座を開催し、府民164名が参加されました。

開催に先立ち、京都府医師会 森 洋一会長より「少子高齢化の進む中、医療も変革の必要があり、質の高い在宅医療とケアの提供に向けて、医師会と医療を受ける側の皆さんがともに考え、取組みを進めることができる土壌を作っていきたい」と挨拶がありました。

講演では、永井先生が取組まれている多岐にわたる事業内容などを紹介頂きながら、在宅医療を進めるために、なぜ医療と意識を変える必要があるのかについて、わかりやすくご説明いただきました。最後に「独居でも老老介護でも看取れる在宅医療！独居でも老老介護でも看取れる地域！」を目指して、医療者と患者だけでなく社会全体で看取りの文化を醸成していくことが必要であるとの考えを示されました。

医療法人ゆうの森 たんぽぽクリニック 理事長・永井 康徳先生



京都府医師会館

講演を聞き、死をタブーとするのではなく、亡くなるまでより良く生きるために、「死ぬときのこと」について、自分の大切な人と語りたくなりました。

是非、詳しくは永井先生の著書を読んでいただきたいと思えます。

● 受講者のご意見 (参加者アンケートより抜粋) ●

- 「死」という重いテーマをおだやかな話し方でご講演されたことが印象的でした。具体的な言葉をたくさん教えていただきました。
- 自分らしくあり続ける生活のために、医療を中心とした地域づくりは本当に必要だと痛感しています。また、「食べる」＝「生きる」、改めて感じ入りました。

- 「楽なように、やりたいように、後悔しないように」「最後の瞬間はみえてなくてもいい」特に心に残りました。
- 死についての考え：自分の心の持ち方、行動、生き方 etc. < 死生観 > 終末期の考え方、在り方…過ごし方、取組みについて。在宅医療の現状、先生方、チームの大切さ、苦勞、理解できました。